

「体協いわて」第70号発行記念 巻頭特集

「体協いわて」第70回発行によせて

(財)岩手県体育協会 元事務局長 松舘 完一



この度は、「体協いわて」第70号発行にあたり、平成2年2月28日、創刊第1号から発刊にたずさわった1人として、記念すべき、第70号の発刊にあたり、歴史的な機会に、拙文の依頼をいただき、心から感無量の感謝をもつものであります。

昭和62年4月1日に、事務局長職を与えられ、無我夢中になって、県スポーツ界の皆様から、多分のご指導を給わり、無力ながら、職を8年間果たし得たことに、哀心より感謝しております。

「より高く」「より速く」「より強く」をスローガンとして第1号が発刊されて、今日に至ったことは、栄えある業績と思えてなりません。創刊にあたり、この機関誌をとおして県民のスポーツへの関心を高める期待として、元会長の故：藤原哲夫氏、理事の元岩手日報運動部長の梅原愛雄氏を中核として広く県民へのスポーツ振興を願いつつ、事務局内に、広報委員会を設置し、加盟団体から有能な人材を委嘱し、機関誌の発刊を実施することができました。その発刊の願いに、故：藤原会長が3つの柱を願望とすることとし、その「第1点」は、スポーツ普及及び競技力向上を願っていること、「第2点」は各市町村体協を軸として、スポーツの振興を住民一体となって構築し、長寿社会を迎える社会情勢に対し、「生涯スポーツ」へ展開に努力する必要があるこ

と、「第3点」は、行政の援助、助力により、競技力向上の

ため、基本的な課題である「スポーツ施設の整備」「競技力向上のための経済的援助」さらに、「スポーツ指導者の育成事業」など、行政、関係機関の密接な環境づくりに努力していくことを期して、成果の伸展を願うことが述べられている。

昭和45年夏季、秋季の第25回国民体育大会（通称：岩手国体）が開催され、130万県民が総力を挙げて大会の成果が「天皇杯」獲得という光輝ある岩手のスポーツ史に刻まれたことが最大の宝として県民の誇りとしていることも貴重な事実でもある。その後に於いても、国民体育大会への対応に競技力の向上を最大の重要な課題として鋭意努力して年月を迎えたのですが、結果として、競技力の低下の現象が如実になってきていることは残念の至りである。こうした現実に対し、県体協が太い軸となって、行政の助力を信じ、さらには、市町村体協、各競技団体、高体連、中体連、と協張し合い、それぞれのもつ特性が発揮されているよう願っております。今、第70号発行を期して、岩手のスポーツ界発展の一助ともなる「体協いわて」の内容の充実を図り、伸展されるよう祈念して、拙文の終わりいたします。

私と国体 ～国体皇后杯得点獲得のおもいで～

塚田 美和子



今から20年前、私は「競歩」と出会った。それまで「競歩」という種目を知らなかった私が、どうしてこの「競歩」に本気で取り組もうと思ったか…。理由は単純明快。

「フォームがたまたま形になった」ということと、「国体に出れるかも知れない」という、ただそれだけの事であった。根が負けず嫌い、人と違ったことがしたいという私にはもってこいの種目だった。企業がある県や、企業の選手は「国体」はお祭りという人もいるけれど、私にとって「国体」とは一回一回が真剣勝負。社会人になると、ジュニア時代に一度は日の丸を付けた私にとっては、自



分もまだ競技者なんだぞと世間にアピールする最高の自己表現の場だった。

- 福岡国体 (H2) まさか自分が国体選手に！
そして6位
- 石川国体 (H3) やるだけのことはやったという充実感。そして優勝。あの時の感動を越える試合は、今も現役中もない。1位
- 愛知国体 (H6) 2年ぶりに国体種目に。スランプ続きの学生の時、この国体が復活のきっかけに。4位
- 福島国体 (H7) 完全なる調整ミス。悔しい6位
- 広島国体 (H8) 社会人1年目。

久々に自分は競技者なんだと確認出来た国体。4位
久々の表彰台。(陸上競技の表彰はこの頃までは、3位までがグラウンドで表彰。4位以下の入賞は室内での表彰だった) 県大会で高校以来2度目の負けを味わい、国体出場を逃した昨年。辛抱の一年を越えて良かった。3位

- 熊本国体 (H11) 不調な1年間。引退を考え始めた国体。6位
- 富山国体 (H12) 引退覚悟で臨んだ大会。過去最低の8位。しかしタイムは上出来。まだ全国で戦えることを確認出来た国体。
- 宮城国体 (H13) 国体巡業中、一番の近場宮城県。どうせならもうちょっと遠くに遠征したかった。第6位。気がついてみたら9回出場・連続入賞。ここで辞めるわけにはいかないと決意を新たに。
- 高知国体 (H14) 初めて心と身体が対話しながらコンディショニングでき、2年ぶりの22分台。第6位。10回目の国体と言うより、私にとってはやはりその時、そ

の 때가旬な国体。あつという間の出来事だった。

静岡国体(H15) 高知国体を機に、一度は競技を辞めてみた。しかし、高校生を見ていたら、まだこの子達に勝てるかな?と半年ブランクの一発奮起!第9位。11回



目の出場で、初めて入賞を逃した。悔しいと言うよりは、これで本当に引退かなと素直に思えた大会。

陸上競技の国体種目は2年ずつ見直しがあり、女子競歩が実施されない時もあったが、振り返れば、高2から30歳まで数えて11回出場したことになる。そして10回までは、連続で入賞していた。私が個人で獲得した皇后杯得点は合計で40点。有森裕子さんの言葉を借りれば「自分で自分を褒めてあげたい」。

私の場合、期待されてこういう選手になったわけでもない。体育教員でありながら、体育は苦手。おまけに幼少時代はムチムチ体型、いわゆる肥満傾向の私であった。運動会は嫌いだった。小学5年から痩せることを目的にミニバスケットを始め、少し痩せたら運動の継続が楽になり、中学では姉がいるからと言う理由でソフトボールをやり、人に負けたくないという気持ちだけで、部活に励んだ。部活のロードワークのお陰で、体重も落ち、初

めて学校の駅伝選手に。しかし高校では、中学で県大会に出場できたソフトボール部に入部しようと思っていたが、蓋を開けてみると、行った先に部がなかった。そしてなんとなく陸上競技部へ。1年間は長距離をやっていたが、練習の一環で長距離全員競歩をすることになり、たまたま形になった私に恩師が強く勧めてくれた。ただ、その時の流れと、私の周りにいる人のお陰で、こういう実績を残せたと思う。もし、私に何か特別の才能があるのだとすれば、「負けず嫌い」と「自己表現」をしたいという気持ちが人よりも強いのかも知れない。そして、「選手としては息が長かった」それだけの事かも知れない。

今、二巡目国体開催に向けて、各種目とも盛んに強化が行われている。そして、未来のオリンピック選手を目指す、スーパーキッズの取組も注目を浴びている。私よりもずっとずっと運動能力が高く、才能豊かな若き選手達には、「負けず嫌い」で練習に取り組み、注目されることをプレッシャーではなく「喜び」に感じ、「息の長い選手」になって欲しいと思う。そして、2016年の岩手国体だけに限らず、色んな土地での国体で岩手の選手として光り輝いて欲しいと思う。

